

体温計

vol.148
2020 12月号

アレルギーとは？

アレルギーとは「本来無害なはずのもの（食物や、刺さないダニ、花粉など）に対して」、「異常な免疫反応を」「再現性を持って」起こす状態を呼びます。これは今も昔も変わりません。しかし、アレルギーの診療は時代とともに大きく変化しています。今回の特集では、当院各科の現在のアレルギー診療についてお話しします。



特集 アレルギー

こどものアレルギー 大人のアレルギー
アナフィラキシー



こどものアレルギー 小児科

こどもの心身全体を **まるっと** 管理しています



小児科医長
アレルギー専門医
酒井 秀政

小児期のアレルギー疾患をすべて診察

小児科では、小児期のすべてのアレルギー疾患を診察しています。赤ちゃんの最初の乳児湿疹が、アトピー性皮膚炎の始まりとなり、そして食物アレルギーにもつながっていくという考え方が主流の今、赤ちゃんの治りにくい湿疹は積極的に治療し、離乳食の進め方の指導もセットで行います。食物アレルギーで生じる重篤な反応には、実は隠れ喘息や隠れアレルギー性鼻炎が関係するともされ、日常のそれらの管理も並行して行います。つまり、アレルギー疾患はそれぞれ独立したのではなく、総合的に評価することが重要であり、小児科では全身の皮膚や鼻の穴までくまなく診察しています。

さらに、喘息やアトピー、アレルギー性鼻炎があることで、さまざまな学校活動への影響が出てしまい、情緒の発達時期のこどもの心理面に影響を及ぼしているかも知れません。こういったこどもの自己肯定感への配慮もしつつ、こどもの心身全体を俯瞰的に「まるっと」管理するのは、小児科の得意なところです。

意外な症状も

アレルギー疾患は、時に意外な症状として顔を出していることがあります。右ページには、隠れたアレルギー疾患にみられる日常の小さな不安や疑問をお子さんの年代別に表にしてみました。思い当たることをございましたら、ぜひお気軽に外来で相談してみてください。

アレルギーと向き合うために
こんな診療をしています

● 何のためにやるの？ 食物負荷試験



アレルギーと言われてそのままになっている食材はありませんか？食物負荷試験はその食物にアレルギーがあるかないかだけでなく、どの程度まで食べると症状が出るのか、どの程度なら大丈夫なのか、といった評価も含みます。食物アレルギーへの「漠然とした不安」を「具体的な恐れ方」に変えるのも負荷試験の役割です。当科では、敢えて画一的にはせず、お子さんの検査目的に応じて負荷量・調理法を決定しています。

● 実は盲点かも？ お薬の使用法の指導

アレルギー体質のお子さんでは「お薬の継続」が必要になることが多いですが、内服薬は飲みば効いてくれるのに対して、軟膏や吸入、点鼻薬・点眼薬は使い方が異なると効果が違ってきます。特にアトピー性皮膚炎の場合は、塗り方や塗るスケジュールを変えるだけで効果が劇的に変わることもよくあります。当科では外来の中で、これらの使い方を時に実技も交えながら細かく指導しています。



● アレルギー体質を直したい！ 舌下免疫療法

お子さんのアレルギー疾患の予後を大きく変える可能性がある治療の一つが、舌下免疫療法です。ダニやスギ花粉のタブレットを舌の下に置いて服用することで、アレルギー反応を徐々に起こりにくくする治療で、当科では5歳の子から積極的に導入しています。生来悩んでいたさまざまな症状が消退し、学校生活でより能力を発揮できるようになれば、ひょっとするとお子さんの人生が変わる可能性もあるかも知れません。



日常の小さな不安、疑問…
もしかして、アレルギー？

そうだ、相談してみよう
小児科で！



食物アレルギー？

アトピー？

喘息？

アレルギー性鼻炎？

乳児期



よく吐く・血便
体重増えない

離乳食の
アレルギーが
こわい

乳児湿疹が
よくなる

風邪ひくと
ゼロゼロする



疲れやすい

鼻がいつも
ジュルジュル

幼児期



完全除去の
ままでいいの？

風邪のあと
咳が治らない

聞こえにくそう

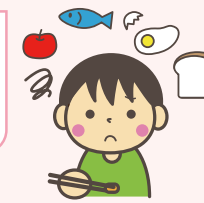
鼻血が多い

落ち着きがない・集中力がない

学童期



給食で
食べられるもの
を増やしたい



マラソンが
苦手で…

朝ずっと咳払いしてる

頭痛が多い

よく眠れない・学業に身が入らない

思春期



昔診断された
アレルギー
このままで
いいの？

顔が真っ赤で
毎日つらい
何とかしたい

体力に
自信がない

受験生の前に
スギ花粉に
備えたい



原因がよくわからないけど、何かのアレルギー？

〈ご注意：上に掲げた症状や疑問はアレルギー疾患に特有でないものも含まれています〉



必要があれば、各診療科につなげます



大人編へ

大人のアレルギー

アレルギーは全身的な病気ですが、成人のアレルギーの代表的なものをお話します

気管支喘息

呼吸器内科

科長 アレルギー専門医 藤井 雅人 

● 気管支喘息とは

主にアレルギー性の炎症によって気管支が狭くなる病気です。発作性にゼーゼーする喘鳴と、咳、痰、息苦しさや胸苦しきといった症状があります。

● 診断のポイントは

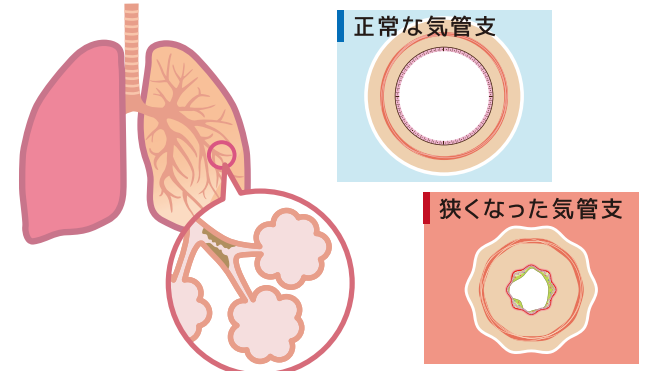
発作は夜間、早朝に起こりやすいのが特徴です。小児喘息やアレルギー疾患の既往、家族歴、職業歴、ペットの飼育歴なども参考になります。

● 検査について

呼吸機能検査で気道がどのくらい狭くなっているかがわかります。気管支拡張剤を吸入後に改善すれば、喘息の可能性がります。また呼気一酸化窒素検査は、喘息の診断やコントロールの指標となる検査です。血液検査でアレルギー体質の有無、原因物質を調べることもあります。

● 治療について

吸入ステロイド薬と気管支拡張薬を組み合わせる治療です。アレルギーの一部を抑えるロイコトリエン拮抗薬を追加することもあります。調子が悪い時は、ステロイド薬を内服したり、点滴したりします。発作がたびたび起きるような難治性の方には、アレルギーを引き起こす物質 (IgE) や好酸球という免疫細胞の働きを抑える注射薬をお勧めすることもあります。



アトピー性皮膚炎

皮膚科

主任科長 間嶋 佑太 

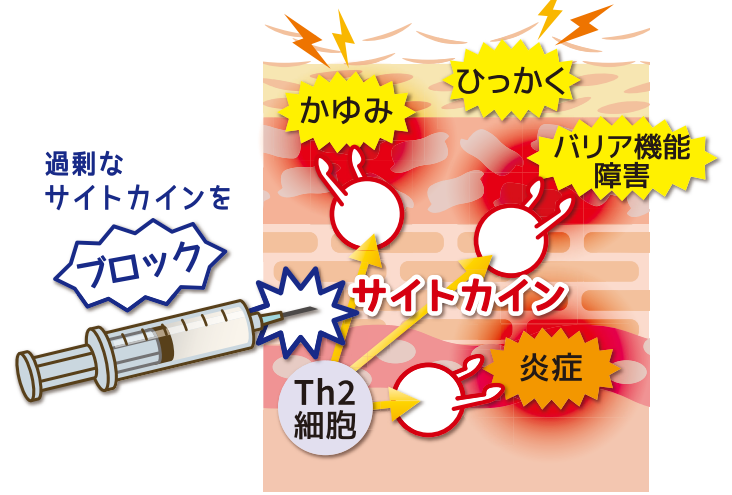
成人のアトピー性皮膚炎の治療は近年、大きく進歩しています。

2018年に登場したデュピルマブ (デュピクセント) はアトピー性皮膚炎に対する初の生物学的製剤 (注射剤) です。生物学的製剤とは生物が産生するたんぱく質 (この場合は抗体) を医薬品に利用するものです。デュピルマブはアトピー性皮膚炎患者で問題となる Th2 細胞から産生されるシグナル (サイトカイン) をブロックすることで病態を改善します。

この薬剤はこれまでの治療を上回る効果が期待できるだけでなく、生物学的製剤のため肝臓や腎臓への負担がありません。ただ、完治を目標とする薬ではなく、病態を安定させる薬なので継続的な治療が必要です。

そのため、2週に1回の皮下注射が必要ですが、自己注射を指導しますので、副作用がなく、病状が安定すれば通院は1-3ヶ月に1回となります。適応となる患者さんは一定の重症度以上といった決まりがありますので、皮膚科にご相談ください。

さらには2020年6月には新しい作用を持った外用薬 (JAK 阻害薬) も発売され、今後も期待の新薬が控えており、成人のアトピー性皮膚炎治療は大きな変革期を迎えています。

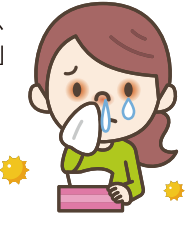


鼻の花粉症 アレルギー性鼻炎

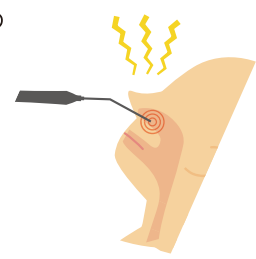
耳鼻咽喉科

耳鼻咽喉科・頭頸部外科医長 水越 彬文 

耳鼻咽喉の一般的な診療をする当科ですが、皆さんのイメージでは、いわゆる「花粉症」のイメージが特に強いと思います。鼻水、鼻づまり、くしゃみに代表される種々の症状をもたらす疾患ですが、当院では内科的・外科的両面からのアプローチを行っています。



一般的には噴霧ステロイドや抗アレルギー剤治療で症状を抑えますが、完全な抑制が困難な場合は外科的な方法が有効なこともあります。難治性のアレルギー性鼻炎、鼻づまりは鼻水による閉塞の他、鼻の形態のゆがみや鼻の粘膜の腫れによる閉塞が不快感の原因となることが多くあります。物理的な閉塞は内科的なアプローチでは限界があるため、手術によりこれを改善します。



下鼻甲介 (かびこうがい) と呼ばれる鼻の大きなヒダを減量し、また鼻中隔とよばれる鼻の真ん中の敷居が歪んでいる場合はこれを治すことで鼻の通りをよくします。鼻水の症状が強いときはあわせて鼻汁の分泌神経を一部切断することで症状の緩和を図ります。

かつて、鼻の手術というと術後に顔がはれるつらい手術の代表例でした。現在ではほとんど内視鏡を用いて行う内視鏡下鼻内副鼻腔手術となり、侵襲の少ない手術となっています。当院ではコーンビームCTを導入しており、鼻腔内の状態の評価を手軽に行えますので、難治性の鼻閉にお困りの際は一度ご相談ください。

また当院では舌下免疫療法 (SLIT) も施行しています。アレルギーが配合された治療薬を繰り返し服用することで、アレルギーへの体質自体の改善を図る療法です。

舌下免疫療法が開発され手軽に行える治療法となりましたが、3年~5年と長期に渡って毎日治療薬を飲み続ける必要があり、投与初期には強いアレルギー反応が起こらないか見守りが必要になるなど、専門の医師の知識が必要となります。注意点などあわせてご相談ください。



目の花粉症 アレルギー性結膜炎

眼科

主任科長 井上 亮 

● 目の花粉症について

花粉が原因となり目の粘膜 (結膜) にアレルギー症状がでます。目の痒み、充血、ゴロゴロ感、かすんで見える、痛み、涙、目やに、熱い感じがする、白目が腫れる、まぶたが腫れるなど症状は多彩です。

花粉の種類は2月から4月ごろのスギ、ヒノキが最もよく知られていますが、実は夏のカモガヤ、秋のブタクサなど約60種類もの植物が原因になると言われています。花粉症は原因となる花粉によって発症する季節が決まっていますので、われわれは季節性アレルギー性結膜炎と呼んでいます。

眼科での治療は、目薬でアレルギー症状を抑えることが中心になります。かく言うわたしもかれこれ20年以上花粉症と闘っていますが、皆さんには初期療法をお勧めします。初期療法とは花粉が飛散する2週間ほど前から始める治療のことです。初期療法により症状のある期間を短く、また症状を軽くすることができる言われています。待ち伏せして敵 (花粉) をやっつけるイメージでしょうか。

皆さん一緒につらい花粉の時期を乗り越えましょう!

